

フィールドスタディーでの学びを踏まえて

長崎大学多文化社会学部 4年 福島 雄平

本調査プログラムでは2019年9月30日から10月2日にかけて政府機関を含む五つの団体にお邪魔してインタビューを実施し、さらに施設の職員やそこで生活する人と交流させていただいた。20人以上の大きなグループであったにも関わらず、どの施設の方も温かく迎え入れてくださったことに感謝したい。本フィールドスタディーに参加した学生の一人が、DAWNというJFC（Japanese-Filipino Children: 主に日本人の父親とフィリピン人の母親のもとに生まれた子どもたち）を支援する組織の職員に対して、私たちのような日本人の学生にどのようなことを期待しているか、と尋ねた。それに対しての職員たちの答えは、教育機会の支援、勉強に必要な資金の支援などがあった。しかし、そのなかでも筆者が最も強い印象を持ったのは「ここで学んだことを日本の友人や家族、日本の人たちに伝えてほしい」という答えだった。ここでの筆者も含めた「私たち」は「学生」であるという前提が、この答えに、そして「私たち」の無意識の中にあったと言える。

しかし、「私たち」は「学生」でありながら「調査者」でもあったことを忘れてはいけない。少し長いですが、社会学者である岸政彦（2016：164）の文章を引用したい。

「調査というものは…（中略）…どこかもっとも基本的なところで、他者への暴力です。「かれら」は、「私たち」から調査されるために生きているわけではありません。「かれら」がそこで暮らし、悩み、傷ついているような場に、私たち調査者はずかずかと土足で踏み込んで、語りを収集して、そして去っていくのです」。

学生であったとしても、JFC、人身売買の被害者、ストリートチルドレンとその支援者たちの時間を奪い、生活に入り込むということは暴力である。しかも、20人もの「他者」が突然、かれらの生活に入り込んで、「話を聞かせてほしい、一緒に交流したい」とやってくるのである。フィールドスタディーという名目ではあっても、そこで一方的に学んだ（＝理解した）つもりになることは大変危険である。

筆者の訪問した Voice of the Free（以下 VF）では人身売買の被害者である女性たちと、

チャイルドホープではストリートチルドレンと、話をしたり一緒に遊ぶ時間があった。特にVFでは相手が人身売買の被害女性ということもあり、筆者の周囲の学生もいざ交流しようというときに躊躇している様子が見られた。彼女たちはその多くが性的虐待の被害者でもあったので、特に筆者も含めた男性がどのように接することができるのかという問題に直面した。しかし、彼女たちは「ようこそ（私たち）家族へ」と歌を歌い、筆者が彼女たちの間に入り込んでも当たり前のように話しかけてくれた。このとき、筆者を含めた「私たち」は「調査者」でありながら、それだけではない「私たち」と「彼女たち」の実際に接することで生まれる新しい関係性の中で自分たちの立場をつくっていたと言える。「あなたが、いまだのように目の前の人と向き合い、なにを投げかけ、受けとめるのか。そこに「わたし」をつくりだし、「あなた」という存在をつくり出す社会という「運動」の鍵がある」（松村 2017:84）という言葉通り、「私たち」は単に「調査者」であるだけでなく、関係性の中で自己が揺さぶられることで、「私たち」と「かれら」（VFの文脈に沿うならば「彼女たち」）との境界線が曖昧になるという「違和感」の当事者になることができる。そしてこの「違和感」は、他者を理解する上での掴みの役割を果たす。これを実際に体験できたことが筆者の最も大きな学びであった。一方で、依然として「学生」であるという属性が、VFやチャイルドホープ訪問で出会った人たちと関係性を築く上での媒介となった可能性についても無視はできない。その点で筆者も含めた学生たちは、調査者と支援者（当事者により近づくことのできる他者）の間をうろうろするような揺さぶられやすい存在だったのではないだろうか。

初めに取り上げたDAWNの職員からの「友人や家族、日本の人々に学んだことを伝えてほしい」という願いに、どのように応えることができるか。これについて、本レポートのように文章にまとめる、人を呼んで報告会をするといった具体的な取り組みは考えられる。しかし、実際に学んだことはデータや実情がどうであるかといった客観的なものだけではない。筆者の学びが関係性の中で生まれる「違和感」であって、それが他者理解への第一歩であるとするならば、やはりその「違和感」を伝える努力が必要になるだろう。そして、ここでも「学生」であるということは、他の学生や本フィールドスタディーに興味を持ってくれる人たちとのコミュニケーションにおいてプラスに働くと考えられる。筆者は、学生であることを活用して、話を聞いてくれる人がこれから「違和感」を感じる機会を得るための入り口を上手くつくることができたらいいと考えている。それは調査者としても求められていることであるし、このフィールドスタディーの意義にもなり得るものだ

と考えているのである。

参考文献

- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美（2016）『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣。
松村圭一郎（2017）『うしろめたさの人類学』ミシマ社。